

十月になると、パリの美術界もシーズンに突入するようである。夏の暑い日はオフの画廊が多いようで、いくら芸術の都パリでも絵を見る気になれないらしい。

先月、沖繩の美術家数人と、友人たちでパリへ行くチャンスがあった。パリ最大の美術展示場であるグランパレでは

「F.I.A.C.」(国際現代美術見本市)が開かれていた。ヨーロッパ各国をはじめ、米国やメキシコ、オーストラリアや日本など、世界の有力なディーラー(画廊)が二百軒近く出店している。

# 唐獅子

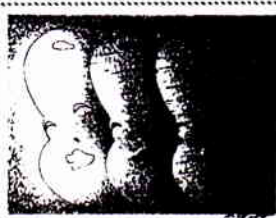
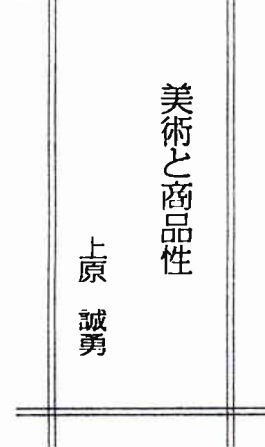
## 美術と商品性

上原 誠勇

毎年十月の初めに開かれるという、この大美術見本市は、今年で十六回目を迎え、世界中の美術コレクターやディーラー、美術ファンなどが殺到して、連日にぎわうところである。

リストなど、広範にわたるものであった。しかし、評価が高く有名作家の作品だけという訳ではなく、むしろ、コンテンポラリー(今日の作家)が主体であり、各の画廊が推す作家の具体

ヨーロッパの美術マーケットが、日本より百年も早くできたといわれるのだが、芸術とマーケットがこれほど密着しているとは想像だにしていなかった。今を生きて、今を表現している作家



カッタ・大久保 彫

たちの作品が、国際マーケットで盛んに流通しているのである。現代美術は日本では売れないという定説すらあるのだ

われわれが行った最終日も、大変な人で人気のほどがうかがえた。展示されている作品はよく知られたピカソやミロ、シヤガールなどの巨匠ものから、アメリカンアートのステラやク

的評価を問う展示会という印象が強く残った。特に目を引いたのは、新進の現代作家ものを扱う画廊で、その若い作家たちの作品がよく売れていることである。

が、想像できないことである。芸術と商品性が深く関係していること、完べきなまでマーケットが成立していること、やはり芸術と伝統の都パリである。

(画廊沖繩代表)